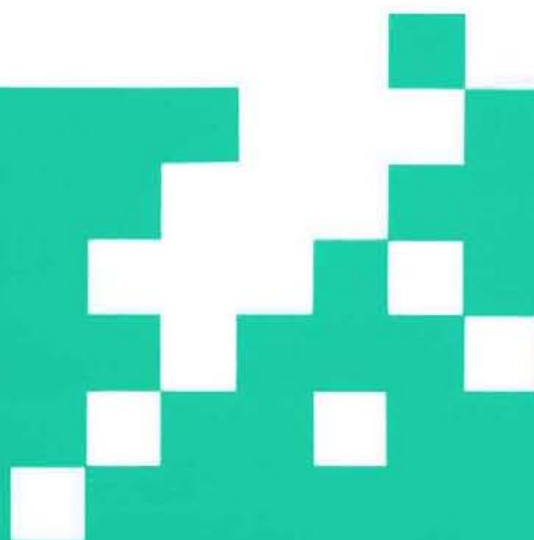


住環境の計画

1

住まいを 考える



住環境の計画編集委員会編

扇田 信・今井範子・疋田洋子・町田玲子・西村一朗著

彰国社

まえがき

本巻のねらいは、住宅そのものではなく、住宅の中あるいは住宅周辺で営まれる住生活そのものについて考えることにある。その意味では建築学的ではなく、家政学あるいは生活科学的な見方にたっているといえよう。そのことは後続の目次編成を見ていただければ全体の性格が推測できることと思う。

第1章では、住宅が人間の生活にとって、どのような意味をもつかを考えようとした。生活があまりにも複雑多様でわずらわしいので見失いがちであるが、単純明快な生活を何万年も繰り返してきている動物と巣の関係を見ると、人間の巣つまり住宅も、生命の営みと同義といってよいほど重要なものであると感じる。ただ歴史と文化を発展させてきた人間の場合、生きる糧を求める生産様式の発展と、それを繞る風土的環境とによって住生活や住宅のあり方もさまざまである。それをきわめてラフスケッチながら通覧してみた。

第2章、前章がいわば総論的であるのに対して2章以下は各論といえよう。日本の住生活ぶりをもつばらの対象として、それぞれ独自の側面から考察しようとする。2章では、日本の大小都市にさまざまな恰好でひしめいて建つ住宅群を、住居観あるいは住み方思想の面から型わけしつつ、日本の住宅像を紹介しようと試みた。それぞれの住み方スタイルは時代的背景をもちながら現代に至っている。また農家住宅や町家は本来主流の伝統性をもちながらも、今はむしろ保存運動の対象である。それら各タイプの発展を歴史的に眺めると同時に、日本の住宅紹介ならびに現代の動向を概観しようとしている。

第3章では、これまでと趣をがらりと変えて住まいにかかわる生活様式の問題を取りあげている。たとえば座るか腰掛けるかは明治以来住生活上の大問題であったが、このことは和洋の衣生活とも大きな関連がある。また履物を脱いだり履いたりする履床の様式とも根源的なつながりがある。めまぐるしく変わってきた

日本の住生活の中で、それらの妥当性や問題点を洗いだしてみようとするのが、この章である。各国各地方の生活様式は、見かけ上同形でもその背後に長い独自の経歴をひきずっている。

第4章は、住まいの維持管理、収納などの生活面を取りあげている。昔は家事の中で掃除は重要な部分を占めていたが、現代では家財道具・家庭器機の豊富さに対して住宅の狭小さ、ひいては社会的な過剰供給などが収納管理を家庭の大問題にしている。増大するごみ処理なども、これと同系列の問題である。それらはすでに地球環境的規模で問題にされているが、本章では住生活の一側面としてとりあげている。

第5章、これまでおもに1個の住戸にかかわる問題を取りあげてきたが、現代の都市住宅ではマンションを含め公私の共同住宅の比重が非常に大きくなっている。そうすると住生活も戸々の住宅から拡張されたところで濃密な生活領域をもつことになる。この章ではそれにまつわる種々の生活面について考察する。近隣づきあい、駐車場問題、相隣苦情、環境美化などさまざまな問題が、共通の生活であると同時に戸々の住生活でもある。

第6章では、その他の生活問題で住に大きく影響を与えるテーマをいくつかとりあげた。

図版・写真を主とする本巻の作成にあたって、適切なものを探す困難さを痛感すると同時に、多くの著書、出版物などから引用させていただいたことに対し厚くお礼を申しあげたい。また、出版に際しては彰国社の担当の方に多大のお世話をかけ感謝する。

1992年10月

担当編集委員 扇田 信

目 次

1. 住生活を考える	1.1 生きるための拠点——住むとは生きること ……10
	1.2 住まいの原型 ……12
	1.3 移動住居 ……14
	1.4 定住から都市へ ……16
	1.5 工業と都市生活 ……18
	1.6 風土と住まい (1)——暑さ・湿気・乾燥 ……20
	1.7 風土と住まい (2)——寒さ・その他 ……22
2. 日本の住まい諸相とその変遷	2.1 住生活の型と人々の思い ……24
	2.2 接客本位の構え ……26
	2.3 家族本位の住宅思潮 ……28
	2.4 庶民住宅と食寝分離論 ……30
	2.5 戦争と住居 ……32
	2.6 食寝分離とDKの出現 ……34
	2.7 公私をわける住み方と リビングルームの流行 ……36
	2.8 リビングルームの生活と問題点 ……38
	2.9 町屋の発生 ……40
	2.10 町屋の発展 ……42
	2.11 伝統的農家住宅 ……44
3. 生活様式と住まいのかかわり	3.1 食生活と食事の場 (1) ……46
	3.2 食生活と食事の場 (2) ……49
	3.3 衣生活と住まい ……50
	3.4 座る生活と椅子の生活 ……52
	3.5 床と土間と足と (1) ……60
	3.6 床と土間と足と (2) ……62
	3.7 寝どこと就寝慣習 ……64
	3.8 入浴慣習 (1) ……66
	3.9 入浴慣習 (2) ……68
	3.10 慣習と地方性 ……70

4. 住まいの管理	4.1 きれいにする家事 ……72
	4.2 家具のおき方 ……76
	4.3 整理と収納 ……78
	4.4 耐久消費財と家事 ……82
	4.5 生活のマナー ……84
	4.6 修繕と生活 ……86
	4.7 ごみの問題 ……88
5. 近隣の共同生活	5.1 集まって住む ……90
	5.2 共用空間の伝統——ヨーロッパと日本 ……92
	5.3 現代集合住宅地の近隣共同生活と 共用空間 ……94
	5.4 みちと水辺 (脈絡生活空間) ……96
	5.5 車を使う——駐車スペース ……98
	5.6 遊ぶ——プレイ・ロット、オープンスペース ……100
	5.7 集い、ふれあう——集まりスペース ……102
	5.8 スペースをなおす——住棟まわりの空間改善 ……104
	5.9 近所迷惑と共同生活ルール ……106
	5.10 近隣共同生活と人間関係 (組織) ……108
6. 住まいをめぐる諸問題	6.1 現代の住問題——通勤と生活の歪み ……110
	6.2 余暇と居住地生活 ……112
	6.3 家事労働と住生活 ……114
	6.4 高齢者と住居 ……116
	6.5 日本の土地事情と住宅 ……118

図表出典 ……120

本文中の図表名の末尾に付いている片っこ付きの数字は、p.120～121の「図表出典」の各番号を示す。

1.6 風土と住まい (1)

——暑さ・湿気・乾燥

住居の形態は人間の生活様式によってさまざまな変化を示すが、自然風土の条件によって規制される面も大きい。大まかにいうと、それは気候と利用できる自然材の状態で左右されるといってよい。

ここでは年間で酷暑高温が支配的な地域をあげてみたが、そこにも多雨多湿な地域と乾燥した地域の風土の違いがある。

高温で多雨多湿な地域では、樹木や植物が繁茂するから、当然それらが手ごろな建築用材として極力利用される。

このような地域はアジアなら東南アジア一帯が代表的な所かもしれない。そこでは工業製品の影響さえなければ、本来木造家屋が主体で屋根さえも幅広い樹葉や草類を厚く葺き、それが防雨防水の効果を発揮する。また高温多湿に対しては、住居は風通しよく開放的で窓・戸の開口が広く取られるか、壁自体が透かされたりしている。さらに床下の湿気を払うため床を高くする。高い床は湿気払いだけではなく、人や家財を種々の害獣や虫類から守る効果もある。

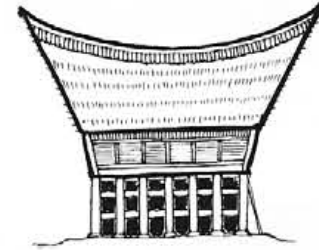
南北に長い日本も南部では、気候風土も似ているし文化の流れとしても、同系統の住居形態を本来もっていたと考えられる。例えば奄美大島の高倉は、台湾にも東南アジアにも類似したものが見られたし、また古代の住居か倉形式と考えられる神社形式も高床である。

一方、極度に乾燥した地域ではほとんど雨が降らないので、屋根が水平に架けられる例もある。例えば地中海周辺では、スペイン、ギリシア、トルコ、アフリカ北辺、あるいはメキシコなどにも見られる。こういう陸屋根形式はあながち暖寒にかかわらず、要するに乾いた、したがって樹木も豊富でない地域の形態といえる。木材に乏しければその風土に豊富にあるものを工夫して利用する。岩だらけの禿山の多いギリシアでは石材が、それもない所では泥を四角に固め均熱の太陽で乾燥させた日干煉瓦を積む。泥・粘土の類は熱容量が大きく遮熱効果も大きい。酷暑酷寒の両地域に向いている。熱気を入れぬため（寒い所では室内の暖気を逃がさぬため）窓は小さくつくられる。地中海沿岸に多い中庭（パティオ）を囲む住居形式も、外部に窓は少なく住居はパティオに開く。また日射の酷しいこの地域では、光を反射させるため壁や屋根までも真っ白く塗り、それが紺碧の空や海と映えて、この地域独特の美しい景観を創出する。

また寒暖の別なく本格的な地下住居が、スペイン、トルコ、中国黄河流域などに数多く現存する。夏は涼しく冬は暖かいという。これも乾燥した風土の所産である。



高温多湿



1.6.2 インドネシア・セレベスの家



1.6.3 日本への文化流入

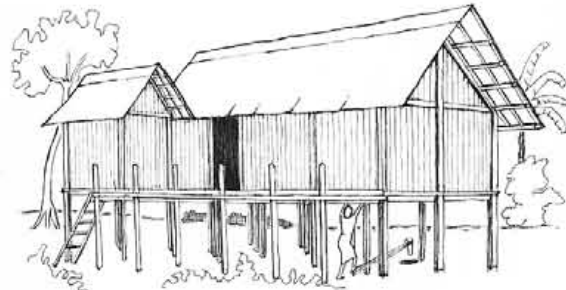


1.6.4 高い床の日本住宅（鹿児島県）



日本の住宅について徒然草の筆者兼好法師も「夏を旨とすべし」と言ったが、その夏は強い日射・酷熱よりも蒸し暑さを指している。それを凌ぐために床は高く室内の風通しをよくする工夫が、昔から日本の家では考えられてきた。図は縁側や簾、欄間など、夏のたたずまいを示す。

1.6.6 旧来の日本住宅の夏のすごし方



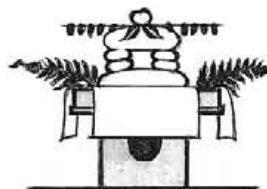
1.6.1 東南アジアの住居（福田朝生：建築学研究より作図）

東南アジアの住居 東南アジア一帯は、高温のみならずはなほ多湿である。図1～2はミャンマーやインドネシアの住家の一例であるが、いずれも風通しを考慮して開放的であると同時に、湿気を払うために非常に床が高くつくられている。また昼間の作業や休息のための露台が広く張り出している。いわゆる南方形式の住家の典型であるが、この形式は古代以来気候風土の似た日本の住宅にも影響を与えているようである。



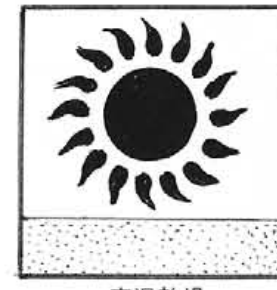
1.6.5 奄美諸島の高倉

日本の床高住居や高倉 日本の文化や住宅形式の成立には、さまざまな系路からの流入が考えられるが、その一つとして南方形式が確かにある。穀類・衣類等貴重なものを、湿気・害獣から守る高倉は、古くは弥生期の登呂遺跡にも発見されたが、奄美大島、台湾それ以南にも同型のものがある。また床高の日本の住家も、一つの風土的系譜を思わせる。



正月の鏡餅の間にかびが生えるのは、よく見かけることであるが、まるで高床住居のような餅の飾り方を鹿児島で見ただ。風土と生活文化のかかわりを感じる。

1.6.7 鏡餅とかび



高温乾燥



1.6.8 酷暑乾燥の中東の住居一例¹⁰⁾



1.6.10 パティオを囲む住居（スペイン・トレドのエル・グレコの家）



1.6.11 パティオに池をもつポンペイの住宅遺蹟

太陽に恵まれ雨の少ない地中海沿岸の各地には、いわゆるパティオと呼ばれる中庭を囲む住居形式がよく見られる。外部に開口は少なく部屋はパティオに向けて開放されている。パティオは強い日射を避け、心地よい居住環境を生み出すと同時に、古くは貴重な天水を貯える場所としても利用されたようである。



1.6.14 グワディスの町並み？

乾燥地域の穴居住宅 必ずしも原始的とは言えず、一つの生活文化といえる穴居形式の住居は、世界の方々にある。地中で外気の影響を受けにくいので、寒い地域、暑い地域を問わず存在している。前に示した中国の洞窟は比較的寒い地域だが、このアンダルシアのグワディスは暑い。乾燥した穿ちやすい黄土層や砂岩層の風土なら掘抜いて部屋をつくっても湿気ることではない。必要な室を設け、室内はそれぞれの国や地方の生活様式を備えて装飾されている。出入口もそれらしく意匠されている。ただ、窓がないので換気筒が設けられたりする。



1.6.15 穴居住居の室内



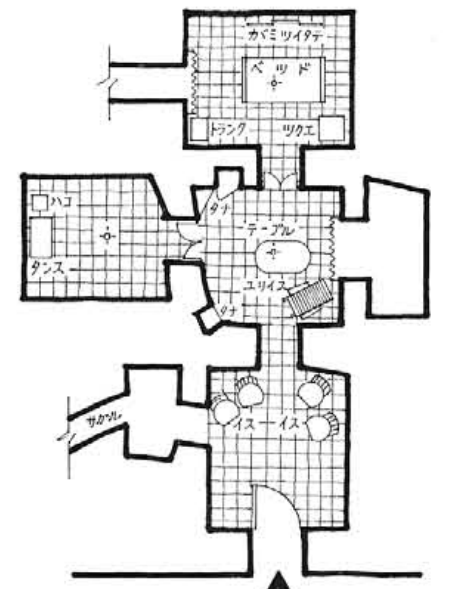
1.6.9 夜は涼しい屋上で寝る

酷暑乾燥の中東地域の一例であるが、余りに暑さが酷しい風土ではどこでも、熱風が入らぬように窓が小さく少ない。雨がほとんど降らないから陸屋根でもよい。この例では昼と対照的な夜の涼気を求め、屋上に寝台が常置されている。

白く輝くスペインの家々 やはり地中海沿岸、エーゲ海地域の地域には、真白に壁を塗った家々が多い。壁だけでなく折角オレンジ色の美しいスペイン瓦までも白く塗こめた家もある。集落全体が真白に輝いている。都市の名にまでカサ・ブランカ（白い家）がある。それは強い太陽の日射を反射させ室内を涼しくするためだという。どれほどの効果があるかわからないが、ともかくかなりたびたび石膏を水でいて塗り替える。スペインでその役は主婦の仕事であるという。

1.6.12 壁をぬる婦人

1.6.13 白い家並み（コスタ・デル・ソル・ミナ）



1.6.16 穴居住居のプラン

2.8 リビングルームの生活と問題点

プライベートな生活空間を確保する一方で、必然的に公的な生活空間が必要になる。その花形ともいえるものが、リビングルームであろう。それは戦後のホワイトカラー層の1種の憧景であったともいえるが、昭和30年以降の高度成長経済期頃から、一戸建中流住宅に流行普及し始めた。

元来、畳の居間・茶の間「公室」といえば公室だったが、戦後はモダンな洋室風リビングルームとして登場するのである。

しかし公室としては、L(リビング)・D(ダイニング)・K(キッチン)・客室等があり、この組合せが各種の公室型を生み出すことになる。Kは実際は公室でないのだが、戦後特色ある室種としてDK形式が出現し、公室形成に切り離せないものになった。

DKは公営住宅に採用されて以後、一般にも非常に普及した。生活水準が上がり、家電設備、家具類が巷に溢れ購買意欲が高まるにつれ、公営住宅では寝室をつぶしてでもLにしようとするほどであったが、一般住宅ではなおさらである。こうしてDK+Lの型が日本の場合には多い。

LD型はヨーロッパではよく見かけるが、日本では上記のような形成過程のほかに、接客を兼ねるLが食事のDと支障があるゆえか、余りなじまなかった。しかし近年では、DとKの分離傾向およびLD型の漸増傾向が出ている。

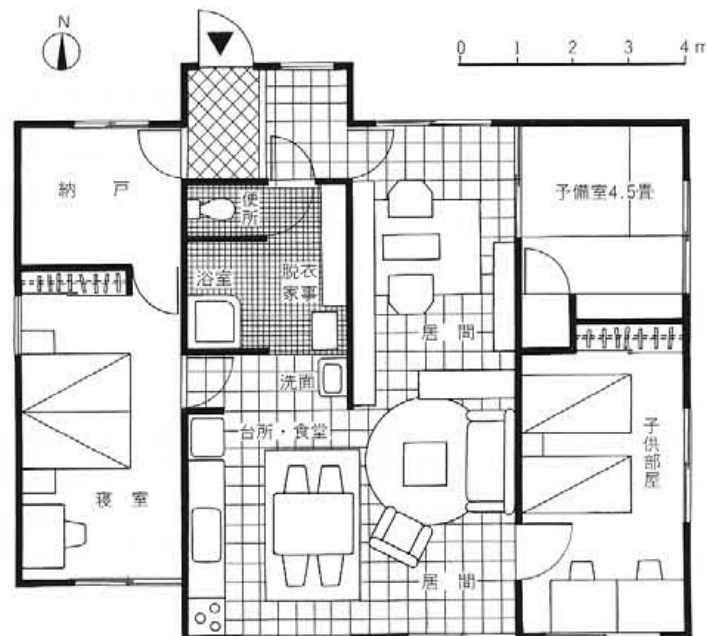
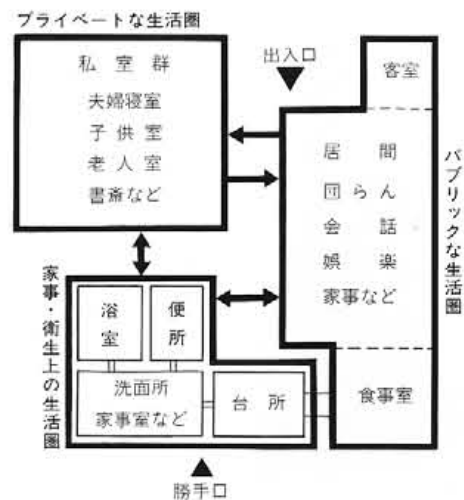
Lを中心とする私室型住宅は、戦後の都市中流住宅の1つの主流になったとも考えられるが、同時にいろいろな問題もある。

1つは、なぜか客室化する傾向がある。理由は、洋室Lにはイスをという固定観念から、応接セットを入れてしまうことにある。一般に多い6~8畳のLでは、これではほぼ万杯になり、家族や子供が気楽に使えない応接間になってしまう。寝ころんだりできるように、西欧では、長椅子・ベッドなどをむしろ置いている。

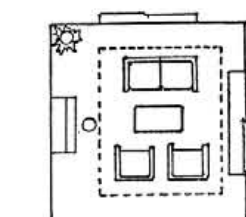
2つ目は、面積の問題がある。Lはさまざまな機能が求められる。団らん・読書・テレビ・ステレオ・ピアノ・接客・手芸・安息等々切りがない。なかには相抗する機能もある。その幾つかを収めるにしても、6~8畳は狭い。住居水準の低さを考えると20畳ともいえないが、10畳位を目標水準に考えてもよいだろう。

3つ目は、接客分離である。一時は家族とともに楽しむ「民主的」接客方式もとなえられたが、つねにそのような客とは限らない。客室を昔のように尊重するというのではなく、家族のL生活を保障する意味で、小空間が必要だろう。

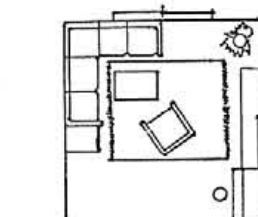
なお多々問題はあっても、日本のL空間も、かなり板について生活されるようになってきている。



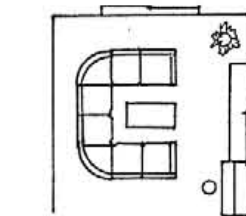
2.8.2 住宅平面の中の家具の配置



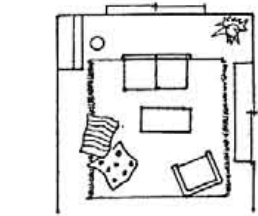
(a) 対面型：従来の応接セットの置き方。ややかた苦しい感じになる



(b) L字型：部屋のコーナーを利用した置き方。会話がはずむ形である



(c) コの字型：暖炉などに対してこういう置き方をすることがある。部屋全体の中で人の居場所を強く印象づける



(d) 散在型：ソファやイス、テーブル、クッションで、自由に座る場所を設定する

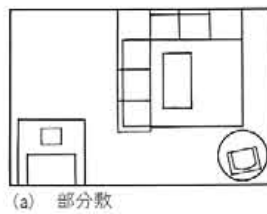
座家具のバラエティや配置の仕方、リビングの実際の機能や雰囲気、座家具の配置列²⁴⁾

2.8.3 座家具の配置列²⁴⁾

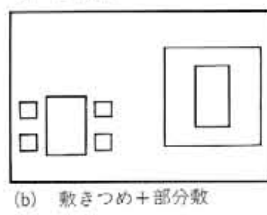
近代の住生活は、家族めいめいのプライベートな生活空間を確保する傾向にあるが、それが強まるほど一方では家族をつなぐ共用の空間が重要さを増してくる。その中心となるものがリビングルームであり、左図はその機能関係を図式化したものである。リビングルームにはさまざまな機能が求められるので、相当な広さが欲しいし、また家族が好んで居りたくなる魅力あるしつらいをしなければならない。

2.8.1 住居の中の生活圏とリビングルーム

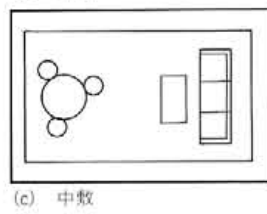
主にリビングルームを中心に家具の配置を示したものである。L、D、Kが1空間でつながっているのが広く感じられるが、かぎ型に折れたDK、入口近くのLと奥のLを仕切るサイドボード等、家具などで空間の独立性が保たれる。



(a) 部分敷



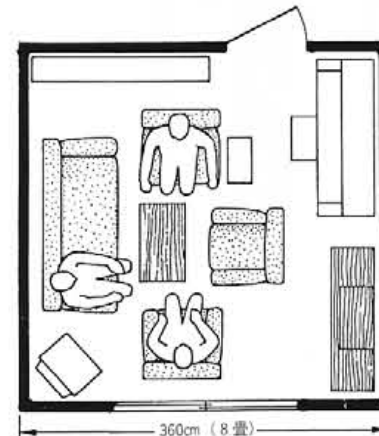
(b) 敷き詰め+部分敷



(c) 中敷

(a) 床仕上げを見せながら各居所を強調するデザイン。(c) 既製サイズを使う場合。

2.8.4 じゅうたんの敷き方²⁴⁾



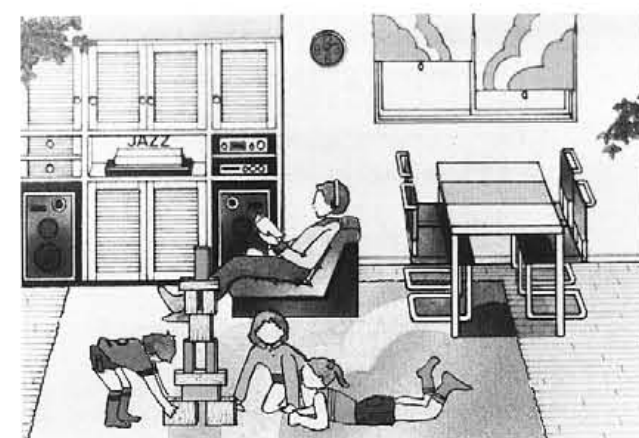
リビングを予定した部屋に座家具とくに応接セットなどを欲張って入れると、床面のゆとりがなくなり家族がくつろげなくなる。

2.8.5 家具の詰めすぎ—応接間化



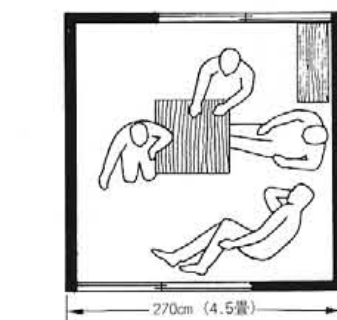
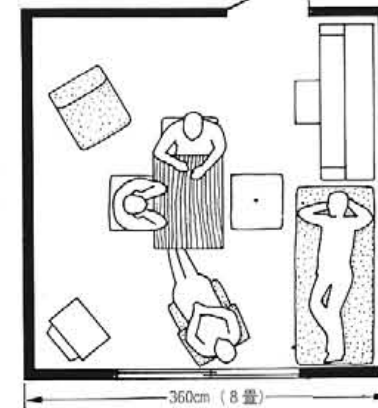
外国例であるが書斎仕事に疲れたらごろりと横になれる。ちょっと段がついているのでクッションにもたれて腰をおろすこともできる。

2.8.8 寝ころべるリビングルーム²⁵⁾



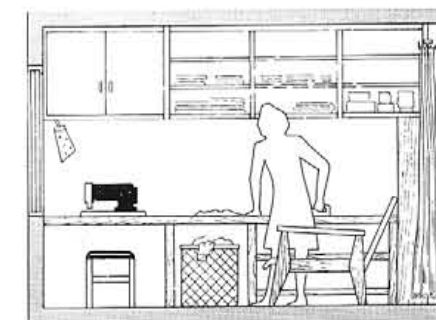
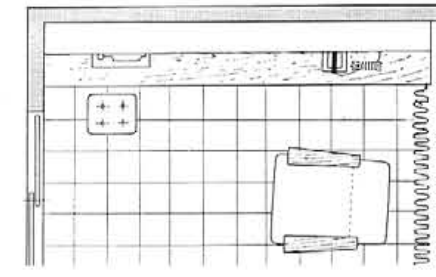
リビングルームでは腰かけねばならぬとは限らない。床に坐っても玩具を広げて遊んでもよい。それがリビングルームであろう。

2.8.10 くつろぐ、遊びリビングルームの床



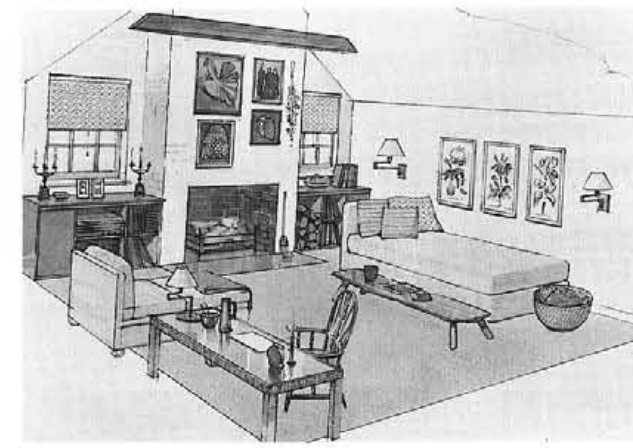
5図と同じ8畳に、寝椅子や椅子、座蒲団あるいはクッションを配した例。4畳半ならむしろ昔のように畳に座るほうがよい。

2.8.6 家具よりゆとりのあるリビングを



家事室が洗濯機の置場であったり、台所周りの空所に当てられたりするが、家事も案外リビング機能の1部であり、リビングルームの快適な一隅に図のように設けると、主婦のセミプライベートな居所にもなりうるのである。

2.8.7 3.3m²~5m²の家事コーナー



昔の日本人が畳に寝ころがったように、椅子生活の歴史をもつ欧米人はリビングにも必要家具としてベッドを入れる例は珍しくない。

2.8.9 ベッドもリビングの家具²⁵⁾



洋室化が進むにつれ、近年和室指向の傾向が見られる。これも座蒲団をふくらませたような椅子、天井、シェードで和風を演出する。

2.8.11 和室に続く和風調のリビングルーム

5. 近隣の共同生活

5.1 集まって住む

人間集団の段階

これから居住地(とくに都市集合住宅地)で、皆で集まって住むことにかかわる話を進めていきたい。人間は昔から寄り集まって集団で住んできたといつてよい。

そこで、住居での家族生活をこえた居住地での近隣の人びとの関係が、当然、発生してくる。

ここで改めて人間集団の関係構造を考えると、おおむね3つの段階で関係が重なり合っているとみることができる。

個人の次にある集団は、いうまでもなく家族であって、いわば「肌と肌(Skin to skin)」の関係である。ここでは「核家族化」や「高齢化」にともなう諸種の問題やさらに「家族型」の「複雑化・流動化」にともなう問題も内在しているが、ここではふれないでおく。

次の第二次関係は、「知り合い」でありこれは「顔と顔(Face to face)」の関係ともいえる。これには、職場や、より広い範囲、地域や都市でのサークル、クラブの関係も含まれようが、週末や休日、さらに退職後の長い期間、過ごさざるをえない居住地でのサークル、クラブの関係がとくに重要であるといえよう。

最後に第三次の関係としては、より広い

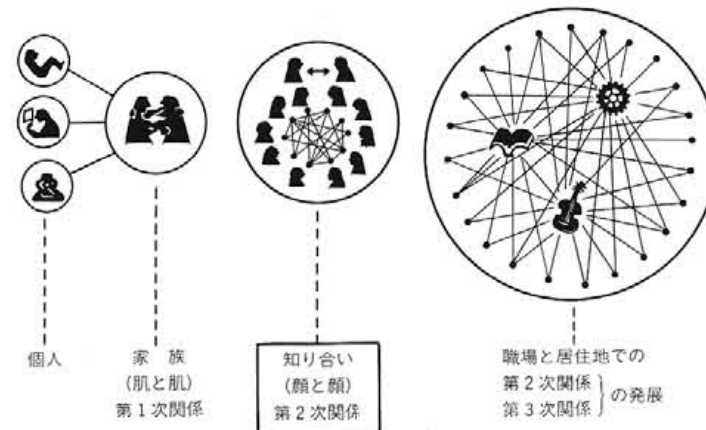
「組織」の関係があり、これを構成・媒介するのは「共通関心」と「情報」といったやや抽象的なものを中心となるであろう。

ここではすでに述べたように居住地での第二次関係、すなわち「知り合い」関係に限定して考え、描いていきたい。それはま

次	つながり	場	説 明
0.	個人		
1.	〈家族〉 (第1次関係)	住戸	・大家族から——小家族への変化 ・生活の基本集団・住まいの単位(戸) ・居住地(すみか)を構成する細胞
2.	〈しりあい〉 (第2次関係)	A 職場 (生産点)での サークル、クラブ	同じ労働にとりくんでいる職場の中でつくられていく人間のつながり——その動機は労働環境・経営・教育および同好
		B 居住地 (生活点でのサークル、クラブ)	隣り近所、近隣のつながり。地域社会の中でのつながり——その動機は生活環境・経営・教育および同好
		C 共通関心 サークル、クラブ	A, Bをこえたより広い同好・趣味・学習・創造活動・社会活動のつながり・芸術・文化・科学・宗教・政治・スポーツ、奉仕など
3.	〈組織〉 (第3次関係)	A 産業・企業 経営・組合	職場の組織——企業として組合として
		B 文化、レクリ、 生活	レクリの組織 同好クラブや学会として
		C 教育	教育制度として
		D 政治・情報	総合機能 政党として

5.1.1 人間関係の構造
(西山卯三)¹⁾

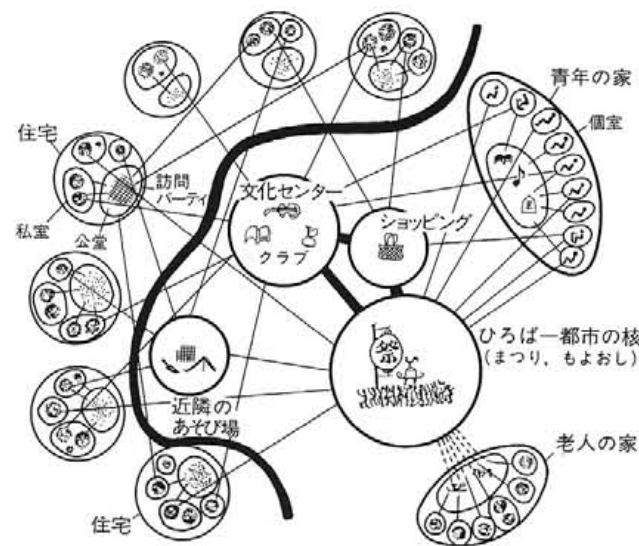
5.1.2 人間関係の段階
(原画は西山卯三)¹⁾



地域社会の人間の、さまざまな「ひろば」を通しての結びつき——住宅の居間や寮のサロンで、近隣の遊び場、文化センターのクラブ室、ショッピングがおこなわれる商店街や盛り場、娯楽場、あるいは緑の遊歩道や都市のコアにある公会堂、スポーツ場や集会広場、野外劇場などが、このむすびつきをささえるフィジカルなウツワ(ひろば)になる。

そういった空間が新しく開発されてゆくことで、個々の住居へのスペースと設備の負担は軽減されてくる。

5.1.3 さまざまな人間関係
(原画は西山卯三¹⁾、太線は筆者加筆)



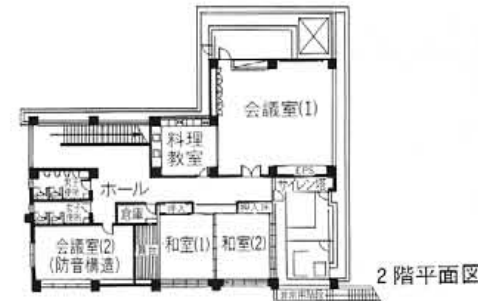
5.1.4 自然発生的な建売団地(共用空間はほとんどない)



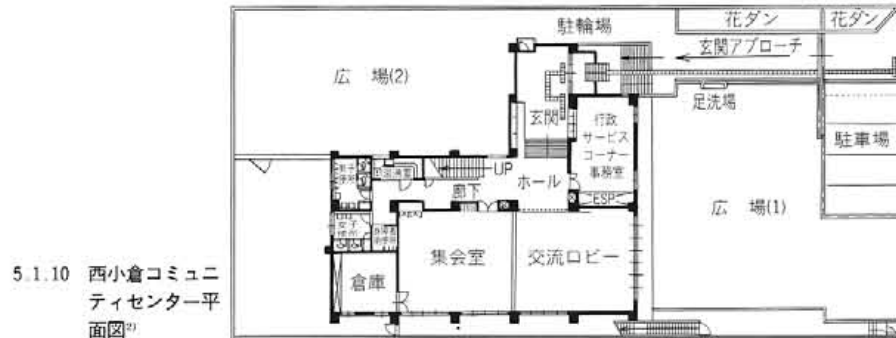
5.1.6 住棟ビロティ部での「井戸端会議」
(香川県宮宇多津団地)



5.1.7 道端での立ち話(道は「つき合い」の基本舞台)



5.1.10 西小倉コミュニティセンター平面図²⁾



5.1.10 西小倉コミュニティセンター平面図²⁾



5.1.11 コミュニティ生活・活動のイメージ³⁾



夜もふけると、休む家も多いが、まだ灯のともっている家もかなりある。いろんな生活パターンの人がまじって生活する集合住宅の様子を示している。

5.1.5 京都M団地のある住棟(某日—平日—の夜12時の様子)



5.1.8 団地での共同作業・ドブ浚い



5.1.9 団地での助け合い・お葬式

た、第三次関係への「パネ」でもある。

都市住民のさまざまな生活

昔の農村社会では、ほとんど構成員全員が一定のリズムやパターンに従って生活してきた。また、封建的な都市社会でも同じ職種の人びとはほぼ同じ所に住み「隣は何をする人か」はわかっていた。

しかし、現在の都市社会では居住地は一定の階層的なバイアスはあるとはいえさまざまな生活スタイルの人びとが思い思いに住んでいるといえよう。例えば、高層住宅地に行って深夜12時頃に住棟を眺めると窓がすでに暗くなって休んでしまった人もいるが、深夜族で未だこうこうと明かりが灯っている所もある。このようにいわば生活スタイルの異なる人びとが一般には「たまたま」一緒に住むことになるのが都市集合住宅といつてよいのである。

「知り合い」関係の諸相

そういう都市集合住宅地でうまく住みなし、できれば楽しく住みつづけるには、住み始めてから隣近所との「知り合い」関係をうまく構築していかねばならないだろう。

その具体的な姿は、後に詳しくみるとして、ここではいくつかの契機を指摘しておきたい。

まず、例えば「道端」でのお喋りといった流動的なものももっとも広範に存在しているし、一方、その居住地構成員がなかば強制的に参加を義務づけられるような「共同ドブ浚い」といったものもある。さらに、隣り近所で自主的に助け合う「お葬式」というものもある。これらは、「たまたま」であっても一緒に集まって住んでいることからくる必然的な「知り合い」関係の下で展開される「共同生活」である。これらの展開の広さや深さは、居住者の経済的、時間的、かつ情動的(知的)「余裕」といったものにも左右されるが、一方で、その居住地での自治会、町内会、管理組合、さらに諸種のサークル、クラブなどの発展によっても規定されているといつてよい。また、これらの共同生活は、それらを行う場、共同生活空間(以下略して共用空間)の整備状況によっても大きく左右されるであろう。

例えば、現代日本での自然発生的な「ミニ開発」による集合住宅地では、共用空間は極めて貧弱であり、伸び伸びした共同生活を展開することはほとんど不可能ともいえよう。一方、公的機関等の計画、開発になるいわゆる「計画的集合住宅地」では一般にはじめから一定水準の共用空間が設けられている。ここでは、「ミニ開発」地の問題を意識しつついわゆる「計画的集合住宅地」を主に取り上げて、そこで集まって住む共同生活とそれを支える共用空間とそれらにおける諸問題を事例をあげて紹介し、検討していきたい。